

[報告] 関東大震災での野澤組生き埋め事故の結末

一般社団法人共同通信社写真データ部嘱託* 沼田 清

Aftermath of collapsed building of Nosawa at Nihombashi of Tokyo in the Great Kanto Earthquake

Kiyoshi NUMATA

Photo Data section, Kyodo news Service, 1-7-1 Higashi Shimbashi, Minato-ku
Tokyo, 105-7201 Japan

Trading house Nosawa & Co. Ltd.'s five-story brick building in Tokyo's Nihombashi district collapsed in the 1923 Great Kanto Earthquake, burying dozens of people alive. A signboard calling for rescue efforts was erected on the spot, and the Asahi Shimbun carried a photo of the scene. However there was no follow-up to the reportage, and experts in the history of Japanese disasters did not know about its aftermath. It was found recently that passers-by joined police and Nosawa employees in rescuing survivors and retrieving the bodies of the dead before a fire engulfed the building at night.

Keywords: Nosawagumi, collapsed, Nihombashi, the Great Kanto Earthquake.

§ 1. はじめに

関東大震災のあまたある報道の中で、ドキリとさせられるのは、倒壊ビル生き埋め現場の写真だ。「中ニ数十人居マス 助けテ下サイ」と書いた急ごしらえの掲示板を立てた被災現場を「築地」として、9月6日付大阪朝日新聞[大阪朝日新聞(1923a)](図1)が写真単独で掲載した。しかしその後どうなったかについては触れていない。



大変気になる報道であり、筆者はその結末を知りたくて2018年初めに調査を始めた。その後、この現場が築地ではなく東京・日本橋通2丁目の東側に面した貿易商社「野澤組(のさわぐみ)」本店ビルであることを東京都中央区立図書館の地域資料室で知った。

図1 大阪朝日新聞が1923年9月6日に掲載した倒壊ビル、生き埋め現場の写真

Fig. 1 Picture of collapsed building that Osaka Asahi Shimbun carried on Sept. 6 in 1923

周辺には白木屋呉服店(図1の左奥のドーム屋根)、丸善書店、加島銀行(図3の中央奥の建物)などのビルが立ち並び、地震で倒壊したのはれんが造り5階建ての野澤組だけだった(図2, 4参照)。辺り一帯は夜になって火の手に襲われ、震害を耐えたビル群もほとんど焼け落ちた。



図2 れんが造り5階建ての野澤組本店社屋(野澤組100年史より)
Fig. 2 Five-story brick building of Nosawa in Nihombashi (from One Hundred History of Nosawa-gumi)

§ 2. 報道の経緯

大阪朝日新聞本紙に続いて、次のような関係する報道があった。時系列で紹介する。

2.1 新聞、雑誌の掲載

9月13日、岩手日報[岩手日報(1923)]が朝日と同じ写真を記事なしで「助けを呼ぶ遭難者」として掲載。場所も会社名も記載なし。

9月15日、『関東震災画報第一輯』[大阪毎日新聞(1923)]で「日比谷付近の倒壊家屋」としてヨコ位置の別図柄の写真を掲載。

9月15日、『週刊朝日臨時増刊一大震災写真画報

* 〒105-7201 東京都港区東新橋1-7-1
電子メール:hqi4832@u08.itscom.net

(第一輯)』[大阪朝日新聞(1923b)]に本紙と同じ写真を同じ説明で掲載。

10月1日、『歴史写真 関東大震災大火記念号第1巻』[歴史写真会(1923)]に「日本橋附近の倒壊家屋より生存者を掘出さむとす」の見出しで、ヨコ位置の写真(図3)を掲載。

「写真は震災直後、日本橋電車交叉点付近の倒壊家屋中に助けを求むる声微かに洩れ聞こゆるに人々駆け集まり屋根を掘り穿ちて生存者を救い出さんとしてつある光景であるが、間もなく猛火に見舞はるゝ迄に其の目的を達し得たか否かは頗る疑問である」と結んでいる。野澤組の名はない。



図3 『歴史写真』が掲載した日本橋のビル倒壊、生き埋め現場の写真

Fig. 3 Picture of collapsed building in which employees are buried alive, that Rekisishasin picture magazine carried on Sept. in 1923

10月1日、『カメラ』の『震災特集号—東京大正大震災記録』[吉川(1923)]に、写真研究家の吉川速男が「大災に遭いて」として次のように書いている。写真は無い。

「流石に銀座通りでは潰れた建物は一軒もありません。京橋日本橋間で僅か四軒の倒壊家屋があるだけです。殊に野澤組の倒壊したビルディングの上には警官其他大勢の人が登って屋根を破壊して中から圧死者や負傷者を救助して居ます。其処には急造の木の立札に『此中に数十人の人が苦しんで居ますから手を貸してください』と書いてあります。其悲惨な光景は実見者でなくは想像も出来ぬ位です。正しく社名を特定した記事はこれが最初のようなだ。

10月1日、都新聞[都新聞(1923)]の「焼け野原に芽を吹く」の記事の後半部で日本橋に言及し、「この中に数十人下敷きとなつてゐますお助け下さい」と貼り紙した西川伴傳本店ではバラックが出来上がって、

「来る一日から開店します」の貼紙に変わる程復興力が旺盛だと記しているが、この筆者は、伴傳と野澤組が隣接していて、倒壊したのは野澤組と知らぬまま、記事を書いている。

10月10日、『大震災画報—文化画報特別刊(東京武俠世界社発売)』と第2号の合巻[柳(1923)]. 中の柳鞭生の「死を賭し猛火を潜り新橋から上野まで」のルポ中「▽魚河岸は一面の火」で、「この倒壊家屋の中に数十人あり、救援御助力を冀ふ」筆太に書いた表札が立ってゐる、日本橋の通三丁目辛酉銀行(※丁酉銀行の誤り)の隣野澤組の建物である、後ろの家が倒れかかったので、前の方へグザとつぶれて屋根が地に覆ひ被さつてゐる、そしてその屋根の上には僅かにアゝ実に僅かに二人の男が、何等発掘の道具も持たずウロウロし居るばかりだ。荷を担いで右往左往するものは踵を接するばかりであるけれども、誰一人この悲惨たる遭難者を助けようとするものは無い。皆自分のことのほかは全く顧る余地が無いのだ。私は猛然として、屋根の上に駆け上がったが、素手では何程の働きも出来なかつた。絶えず襲い来る強震に脅かされてそこを去つた、それから間もなくその辺一面は火の海になつた筈である。彼等の或るものは遂に生きながら焦熱地獄の鬼となつたであらう」と記している。写真は載せていない。

10月20日、『科学知識—震災号』[科学知識普及会(1923)]の写真ページ「帝都の惨害(一)」で「日本橋通り貳丁目の全壊家屋」として歴史写真と同じ写真を掲載。コメントはなし。

10月28日、『アサヒグラフ特別号 大震災全記』[東京朝日新聞(1923c)]に本紙と同じタテ位置写真を「震災直後の白木屋付近」として掲載。東京朝日新聞の編集になって、ようやく正しい場所を記した。しかし会社名はないまま。

11月1日、和辻哲郎は、『思想』[和辻(1923)]11月号の「地異印象記」と題した文に、「白木屋向こう側の鹿島(※正しくは加島銀行)ビルディングにいた」知人のK氏の目撃談を紹介した。「四階の自分の室で地震に逢つて、窓際の本箱を押さへつつ窓から見ていると、隣の野澤組のビルディングの四階の窓越しにあわてて駆けて行く女の姿が見えた、と思う瞬間に突然その建物が低くなってパツとたちのぼる埃のなかに見えなくなった。しばらくして埃が薄らぐ、もう以前の建物は見えなかつた。そうして見渡す限り瓦の落ちた屋根が続いていた」。

11月30日、『関東大震災写真帖』[聯合通信社出

版部(1923)]で朝日と同じタテ位置写真を「築地附近焼失前の倒壊惨状」の見出しで掲載。説明は「此中ニ数十人居マス助ケテ下サイ」何たる悲惨なことよ！これも助かったかどうか、二、三時間後には哀れこの邊一帯も紅蓮に包まれたことであろうとしている。会社名はない。

12月25日、写真家・岡田紅陽の『関東大震大火記念写真帖』[岡田(1923)]ではこの現場をヨコ位置2枚で「火災前の正金銀行附近」として掲載。つまり東京・日本橋を横浜と取り違えている。説明では「小図は同所の倒壊家屋であるが、間もなく襲い来った猛火のために之も焼失した」。絵柄は前掲のものとは異なり、日本橋交差点側から南の京橋方向を撮影。2枚をつなげるとパノラマになり(図4)、右奥に京橋の第一相互館が確認できる。



図4 岡田紅陽が撮影した日本橋のビル倒壊生き埋め現場の2枚をつなげたもの

Fig. 4 The panorama picture of collapsed building in Nihombashi taken by Koyo Okada

1926年2月28日、『大正震災志写真帖』[内務省社会局(1926)]に朝日と同じタテ位置写真を「日本橋白木屋付近の惨事」として掲載。発生から2年半後の発行であるが、会社名はない。

2.2 佐多稲子の体験記

1949年3月、作家の佐多稲子が「私の東京地図」[佐多(1949)]を発表。佐多は、震災時19歳で丸善書店洋品部の店員だった。「最初の揺れが一先ず終わったとき、みんな外へ出る、と誰かにうながされて、(中略)入口から外へ出た。出たとたんに、筋向こうの野沢組の赤煉瓦の建物が、ざあっと前へ崩れ落ちた。あっ、これが大地震なのだ、と私はその瞬間にはじめて、今の経験を見定めた。電車通りは、一瞬の夢魔に立ちすくんだ表情から、驚愕へざわめき立つところであった。私たちは真向いの荒囲いの空地へ集まった(※後にここに高島屋が建った)。(中略)野沢組の赤煉瓦は表どおりへくずれ落ちて、うず高くなっている。私たちがそのそばを通るとき、一人の巡查がその

煉瓦の小山の上に乗って手を振っていた。その煉瓦の下に青バスの車が一台埋まっている、と、大きく書いた板切れを立てていた」。

§3. 当時の報道の実情

野澤組本店ビルの倒壊、生き埋め事故に関して十全な報道はなかったと言ってよい。

3.1 記事と写真が別々で不完全

上記の各報道を点検すると、写真と記事は別々で、一体となって完結したものは皆無である。また写真説明は地名を「築地」や「日比谷」と誤っていたり、「野澤組」の社名がなかったり、不備である。

記事の方では10月1日、アルスの『カメラ』の「震災特集号—東京大正大震災記録」と、10月10日、『大震災画報—文化画報特別刊』でようやくこの現場が日本橋の野澤組であると伝えられた。写真雑誌なのに写真が伴っていないのが惜まれる。

3.2 続報がなく、推定で結論付け

いずれの報道も初報にとどまり、続報がなかった。初報段階にもかかわらず、推定で「生き埋めとなった人は救出されることもなく、その後の火事で焼死したであろう」と結論付けている。関東大震災では東京府だけで24469軒の住家が全潰したという[武村2008]。生き埋め事故はあちこちで発生して、大混乱の中にあり、報道のきめ細かさは期待できなかった。

§4. 『野澤組100年史』

ところが、この掲示板に機敏に反応し、往来の人たち20-30名が救出作業に加わり、午後5時ごろまでに生存者の救出と9遺体の収容を完了していた。その事実を、筆者は2018年5月に当事者の野澤組総務部に取材して確認した。

実は野澤組は1981年5月発行の『野澤組100年史』(非売品)[野澤組百年史編集委員会(1981)]で一章を割き一部始終を紹介していた。それによると、1916年竣工のれんが造り5階建ての社屋(図2)は「小田原提灯を畳んだように崩れた。歩道を埋めて屋根が横になった」。居合わせた社員は約60名。野澤八三郎総支配人以下9名が死亡。無事だった大柴亀太郎支配人が、人手が集まらないのに苦慮して救援を求める掲示を出したという。社史編纂の元資料によれば、閉じていた白木屋の門をたたき、遺骸を包む布を求めた。事情を理解した店長が十反余の白布を

無償で提供してくれた。近くの銀行から現金を下ろし、救出を手伝ってくれた人たちに謝礼を払ったが、固辞する人もいて「世は情け」と社員は涙したという。

しかしこの社史は非売品で、配布先は社内と取引先に限られたため、一般に存在は知られなかった。現在所蔵しているのは神奈川県立川崎図書館、東京都立中央図書館、国会図書館の三館。備えた時期は川崎図書館が発行年に、都立中央は 2002 年、国会図書館にいたっては 2016 年夏であった。災害史研究者の目に触れる機会は少なかつたと思われる。

§ 5. 警察の報告書

野澤組の生き埋め事故を記録したものは、報道記事と社史以外に警察の報告書もあった。写真はなし。『大正大震火災誌』[中村(1925)]の各署報告の第九章に「日本橋新場橋警察署 署長警視 中村知二」があり、「第一、人命ノ救助」の冒頭に

「最モ惨状ヲ呈シタルモノヲ通三丁目野澤組商店ト為ス、同商店ハ第一震ニ因リテ其大半ヲ破壊セラレ、恰モ執務中ナリシ男女事務員二十五名ハ悉ク倒壊家屋中ニ圧倒セラレタルヲ知レル坂巡查ハ、直ニ室内ニ入ラントシタレドモ障碍物ニ支ヘラレテ近ツクベカラズ、即チ隣接セル丁西銀行ノ窓ヨリ其裏口ニ進ミ、辛ウジテ食堂ニ入ルコトヲ得タレバ、男女各一名ヲ救ヒ、將ニ屋外ニ出デントセシトキ、第二回ノ強震アリ、為ニ天井墜落シテ退路ヲ遮リ、一時殆ンド死地ニ陥リシガ、萬難ヲ排シテ漸ク救助ノ目的ヲ達シタリ、會バ(たまたま)萩野谷、和田ノ両巡查モ亦表道路ヨリ屋上ニ攀チテ室内ニ入りシガ、徒手事ニ当タリ難キヲ察シ、付近ノ民家ヨリ斧ト鋸トヲ借用シテ、作業ニ着手スルノ際坂巡查ト遭遇セシガ、之ト相前後シテ二十三名(ママ)ノ当署巡查モ亦来タリ助ケテ相共カスルニ及ビテ十五名ヲ救助シ、元大工町ナル下井病院ニ収容シテ応急手當テヲ施シタリ、而シテ救護ニ用シタル時間實ニ三時間以上ニ及ベル(後略)」と記した。

死者数については触れていない。また、往来の人が緊急の立て看板に呼応して救助作業を手伝ったことは一切言及がなく、すべては新場橋警察署の巡查が当たったとしか読めない。全容を把握するには野澤組の報告と併せて読み解くのが妥当である。

§ 6. おわりに

個々の報道記事は断片的であったが、寄せ集めて紡ぐことで、埋もれていた全体像が見えてきたと思う。

記録されたビル崩壊の様子のですさまじさには、れん

が造りの耐震性は低かつたのだなと今更ながら実感した。支配人がとっさに助力を乞う立札を掲げ、それに応えた往来の人がいたことは時代を超えて心を打つ。その篤志の人たちが警察と社員に協力し、火の手が迫る前に救出と遺体の収容が終わっていたのを知り、胸をなでおろした。

野澤組は大きな痛手を負ったが、危機を乗り越え、2019 年には創立 150 周年を迎える。現在の丸の内の本社は、自社ビルをやめ、堅牢な貸ビルに入居している。

文献

- 大阪朝日新聞, 1923a, 9 月 6 日, 生き埋め現場写真
岩手日報, 1923, 9 月 13 日, 生き埋め現場写真
大阪毎日新聞, 1923, 9 月 15 日, 関東震災画報第一輯, 生き埋め現場写真
大阪朝日新聞, 1923b, 9 月 15 日, 週刊朝日臨時増刊 大震災写真画報(第一輯), 生き埋め現場写真
歴史写真会, 1923, 10 月 1 日, 歴史写真関東大震災大火記念号第 1 巻, 生き埋め現場写真
吉川速男, 1923, 震災に遭いて, カメラの震災特集号—東京大正大震災記録, アルス
都新聞, 1923, 10 月 1 日
柳鞭生, 1923, 大震災画報(文化画報特別刊), 文化研究会, 20-23
科学知識普及会, 1923, 10 月 20 日, 科学知識震災号, 生き埋め現場写真, 口絵写真
東京朝日新聞, 1923c, 10 月 28 日, アサヒグラフ特別号大震災全記, 生き埋め現場写真
和辻哲郎, 1923, 11 月 1 日, 思想 11 月号, 岩波書店 189-204
聯合通信社出版部, 1923, 11 月 30 日, 関東大震災写真帖, 生き埋め現場写真
岡田紅陽, 1923, 12 月 25 日, 関東大震災大火記念写真帖, 東京図案印刷
内務省社会局, 1926, 2 月 28 日, 大正震災志写真帖, 9
佐多稲子, 1949, 私の東京地図, 講談社文芸文庫, 100-102
武村雅之, 2008, 関東大震災の真実を永遠に伝えるために, 地図にみる関東大震災, 日本地図センター, 63
野澤組百年史編集委員会, 1981, 野澤組 100 年史, 31, 32, 81
中村知二, 1925, 大正大震火災誌, 日本橋新場橋警察署, 警視庁, 959-961